

細やかな喜びの殆どは自分とミスエンジェルのことだった。ノートは二人の物語を語っていた。セレナは毎日肌身離さずノートを持ち歩いた。

瞬く間に、一ヶ月が過ぎ、ノートの半分以上が思い出の言葉で埋め尽くされた。

夏至の日の音楽室で、セレナの右側にノラが座った。セレナの頭は真っ白になり、胸の鼓動が聞こえ、楽譜を持っている手は震えた。喜びを抑えながらいつものように歌おうとしたところで、自分の楽譜をノラが見ていることに気づいた。そしてそれは話しかけるチャンスだった。

